笠原順路先生　　略歴

＜学歴＞

昭和46年　4月
　東京教育大学 文学部 文学科英語学英文学専攻 入学
昭和50年　3月
　東京教育大学 文学部 文学科英語学英文学専攻 卒業［文学士］
昭和50年　3月
　中学校教諭一級・高等学校教諭二級教育職員 免許状
昭和58年　4月
　東京大学 大学院人文科学研究科 英語英文学専門課程 修士課程入学
昭和60年　3月
　東京大学 大学院人文科学研究科 英語英文学専門課程 修士課程修了［文学修士］「The Last Phase of John Keats: Odes and After」
昭和60年　4月
　東京大学 大学院人文科学研究科 英語英文学専門課程 博士課程入学
昭和61年　9月
　東京大学 大学院人文科学研究科 英語英文学専門課程 博士課程中途退学

＜職歴＞

昭和50年　4月　東京都立忠生高等学校 教諭（昭和53年3月まで）
昭和53年　4月　筑波大学附属駒場中・高等学校 教諭（昭和58年3月まで）
昭和61年10月　東京農工大学工学部（一般教育部）講師・助教授（平成3年3月まで）
平成　3年　4月　東京大学教養学部・同大学院総合文科研究科 助教授（平成11年3月まで）
平成　4年　4月　「文部省教員組織審査」東京大学 大学院総合文化研究科言語情報科学専攻 博士前期課程 専任助教授合格（M合）
平成　7年　4月　「文部省教員組織審査」東京大学 大学院総合文化研究科言語情報科学専攻 博士後期課程 専任助教授合格（D合）
平成11年　4月　明星大学 人文学部 英語英文学科 教授（平成17年3月まで）
平成17年　4月　明星大学 人文学部 国際コミュニケーション学科 教授（平成22年3月まで）
平成22年　4月　明星大学 教育学部 教育学科 教授（現在に至る）「【院】17-18世紀英詩・文体論研究A、【院】修士論文、【院】英米文学特別研究Ⅱ、コンテクスト・スタディ、教育学基礎演習1、教育学基礎演習2、文化・文学研究Ⅰ、異文化理解1、翻訳演習、西洋古典文学」担当

＜学会及び社会における活動等＞

現在所属している学会

　　イギリス・ロマン派学会、日本英文学会、日本シェリー研究センター

昭和58年	イギリス・ロマン派学会（国内学会）会員（現在に至る）
昭和61年	日本英文学会（国内学会）会員（現在に至る）
昭和62年	㈶日本英文学会事務局 書記・事務局長補佐（平成元年まで）
平成元年	個人研究 イギリス・ピクチャレスク文学～ロマン派文学における廃墟（研究代表者）（現在に至る）
平成 2年	イギリス・ロマン派学会 編集委員（平成12年まで）
平成 4年	文部省 教科用図書検定調査審議会 特別調査員（平成8年まで）
平成 4年	日本シェリー研究センター（国内学会）会員（現在に至る）
平成 4年	日本シェリー研究センター（国内学会）幹事（平成13年まで）
平成 6年	「18世紀詩人および前期ロマン主義詩人」、「後期ロマン主義詩人」、「ヴィクトリア朝詩人」（放送大学）（平成14年まで）
平成 8年	イギリス・ロマン派学会（国内学会）理事（現在に至る）
平成 8年	文部省（文部科学省）教科用図書検定調査審議会 第七部会 委員（平成16年まで）
平成 9年	㈶日本英文学会 大会準備委員会 委員（平成12年まで）
平成10年	日本バイロン協会（国内学会）会員（令和4年2月まで）
平成10年 5月	「イギリス・ロマン派の詩人たち」（小平市民講座）（平成10年7月まで）
平成11年	㈶日本英文学会 大会準備委員会 委員長（平成12年まで）
平成11年	国内共同研究（なし）イギリス18世紀地誌詩におけるロマン主義的要素の芽生え（研究代表者）（平成16年まで）
平成12年	Wordsworth Summer Conference（国際学会）Japanese and Far Eastern Convener（平成17年まで）
平成12年	文部省（文部科学省）　教科用図書検定調査審議会 第七部会 部会長（平成16年まで）
平成12年 4月	イギリス・ロマン派学会（国内学会）副会長・企画運営委員長（平成18年3月まで）
平成13年	個人研究（なし）イギリス18～19世紀の詩における心の拡大と縮小（研究代表者）（現在に至る）
平成13年	日本バイロン協会（国内学会）理事（令和4年2月まで）
平成16年	*European Romantic Review* International Advisor（現在に至る）
平成18年 4月	イギリス・ロマン派学会（国内学会）編集委員長（平成24年3月まで）
平成19年	日本シェリー研究センター（国内学会）幹事（現在に至る）
平成19年 4月	日本シェリー研究センター（国内学会）会長（平成23年3月まで）
平成19年 4月	日本英文学会（国内学会）評議員（平成21年3月まで）
平成21年 4月	（個人研究）Variations on Byron's Dying Gladiator: Chinnery, Hemans, Sotheby, Croly, etc.（研究代表者）（現在に至る）
平成22年 5月	「バイロンとその時代――英国のハロルド、アルプスのマンフレッド、

そして欧州のバイロン」（東京都交響楽団）
平成24年 4月　イギリス・ロマン派学会（国内学会）会長（平成28年3月まで）
平成28年　（その他の補助金・助成金）Study on High-Victorian Representations of Shakespeare with Special Reference to The Vase of Shakspeare（sic.）（研究代表者）（現在に至る）
平成28年　（国内共同研究）齋藤勇の英詩講義ノート（研究代表者）（現在に至る）
平成28年 4月　イギリス・ロマン派学会（国内学会）編集委員長（平成30年3月まで）
令和 4年 4月　科学研究費補助金「令和4（2022）年度 基盤研究（C）（一般）」イギリス・ロマン派第二世代詩人の死と神話形成（研究分担者）（現在に至る）

＜教育研究業績＞

[研究分野]

ヨーロッパ語系文学、美学、藝術論、思想史

[教育方法の実践例]

英作文指導「短期記憶を利用した英文再生訓練」（東京大学教養学部）
平成 6年～平成 9年
随時交信型のオンライン授業（明星大学教育学部）　令和 2年 4月 1日～現在に至る

[作成した教科書，教材]

《共著・共演》高松雄一編『イギリス文学』放送大学教育振興会、1994年，1998年改訂増補。【放送大学、ラジオ「イギリス文学」用教科書】　平成 6年～平成13年
《共著》東中稜代・小泉博一編『イギリス詩を学ぶ人のために』世界思想社、2000年。
平成12年
《共著・共演》大石和欣編 *Introduction to English Romanticism*. 放送大学、2007年。【放送大学ウェブ講義】　平成19年

[実務の経験を有する者についての特記事項]

教育実習生指導（筑波大学附属駒場中・高等学校）　昭和53年～昭和58年
教員免許状更新講習 講師（明星大学）　平成25年～平成30年

[その他]

文部省（文部科学省）教科用図書検定調査審議会 第七（英語）部会　委員、同部会長（2001-04）　平成 8年～平成16年

[資格，免許]

中学校教諭一級・高等学校教諭二級教育職員免許状　昭和50年 3月31日

＜著書＞

1.「キーツの卑俗性」（査読付）　単著　昭和60年　イギリス・ロマン派学会編『イギリス・ロマン派研究―思想・人・作品―』（桐原書店）

2. D. ド・ルージュモン他著『愛のメタモルフォーズ』　共著　昭和62年　平凡社
3.「シェリー，凱旋門、そして「生」――『生の凱旋』研究の序にかえて」（査読付）　単著　平成3年　高松雄一編『想像力の変容―イギリス文学の諸相』（研究社出版）
4.「ロマン派の廃墟」（査読付）　単著　平成4年　新井明編『ミルトンとその光芒』（金星堂）
5.「幻想の都市彷徨－ジェイムズ・トムソン（B.V.）『恐ろしき夜の都市』」（査読付）　単著　平成9年　中央大学人文科学研究所編『ヴィジョンと現実』（中央大学出版部）
6. 復刻版イラズマス・ダーウィン全詩集　単著　平成9年　本の友社
7. 高松雄一編『イギリス文学』（査読付）　共著　平成10年　放送大学教育振興会
8.「『美術年鑑』とロマン派文学―復刻版　19世紀英国ロマン主義文学・美術年鑑、別冊解説」　単著　平成11年　本の友社
9.「『貴公子ハロルドの巡礼』の脱線の起源に関する審美学的考察」（査読付）　単著　平成11年　高橋康也編『逸脱の系譜』（pp. 387-408）（研究社出版）
10. ‘Meditations on the Acropolis’（査読付）　単著　平成12年　M. B. Raizis, ed. *Byron: A Poet for All Seasons*（Messolonghi, Greece: Messolonghi Byron Society）
11.「「古城ドーナディッラ」――ある廃墟詩」　単著　平成12年　松浦暢教授古稀記念論集刊行委員会編『水の流れに――松浦暢教授古稀記念論集』（中央公論事業出版部）
12.「キーツ」（査読付）　単著　平成12年　東中稜代・小泉博一編『イギリス詩を学ぶ人のために』（世界思想社）
13. 上田和夫編『イギリス文学辞典』　共著　平成16年　研究社
14. 笠原順路編著『地誌から叙情へ――イギリス・ロマン主義の源流をたどる』　共著　平成16年　明星大学出版部
15. ‘Mis-Correspondence of Pronouns in Byron’（査読付）　単著　平成20年3月　Société française d’Études byroniennes, ed, *Lord Byron: “Correspondence（s）”*（Paris: François-Xavier）
16.『対訳　バイロン詩集』　単著　平成21年2月　岩波書店
17.「ロマン主義時代の剣闘士詩における写実と藝術の相克―ヘマンズ著「瀕死の剣闘士像」（査読付）　単著　平成24年3月　新見肇子・鈴木雅之編『揺るぎなき信念――イギリス・ロマン主義論集』（pp. 47-65）（採流社）
18.「岡倉天心エピソード註解――斎藤英学塾創立10周年に寄せて」（査読付）　単著　平成28年 5月　『英語へのまなざし――斎藤英学塾10周年記念論集』（ひつじ書房）
19.「『美術年鑑』とロマン派文学――西山《学》へのオマージュとして」　単著　平成29年3月　鈴木喜和、直原典子ほか編『西山清先生退職記念論文集　知の冒険――イギリス・ロマン派文学を読み解く』（音羽書房鶴見書店）
20. “Story of a Provencal Maiden Narrated by a German Lady: A Source Hunting of an Apollophile Who Raved Herself to Death”　Co-authored with Sebastian BOLTE.（査読付）　共著　令和元年11月　日本シェリー研究センター編『フランケンシュタインの世紀』（大阪教育図書）
21. “Croly’s Dying Warrior: The Roman Gladiator That Crossed the Boundary and Turned into Arminius.”（査読付）　単著　令和3年9月　*Boundaries, Limits, Ta-*

boos: Transgression in Romanticism. Ed. Norbert Lennartz, et al.（Trier, Germany: WVT）

＜学術論文＞

1.「ロマン派の理想主義とそのゆく方―シェリーの場合（その1）」　単著　昭和61年　東京大学大学院英米文学専攻編『リーディング』7
2.「バイロンの理想とそのゆく方――ハイディからリーラへ」　単著　昭和62年　『イギリス・ロマン派研究』（11），61-68頁（イギリス・ロマン派学会）
3.「ロマン派の理想とそのゆく方―シェリーの場合（その2）」　単著　昭和62年　8（『リーディング』）
4.「山内正一著『キーツ研究』（大阪教育図書、1986）」《書評》　単著　昭和62年　『英文学研究』64（1），128-33頁（日本英文学会）
5.「理想と懐疑のはざまから―シェリー晩年の抒情性について」　単著　平成元年　『英語青年』132,262-66頁（研究社出版）
6.「シェリーと都市文学の伝統――『生の凱旋』への序」　単著　平成4年　『イギリス・ロマン派研究』（16），17-24頁（イギリス・ロマン派学会）
7.「Authorshipの拡散」《解説》　単著　平成6年　『英語青年』140, 295頁（研究社出版）
8.「Textの拡散」《解説》　単著　平成6年　『英語青年』140, 467頁（研究社出版）
9.「ロマン派の自我意識とそのゆくえ」　単著　平成6年　*Otsuka Review* 30（第30号（1994））, 167-74頁（大塚英文学会編）
10.「ロマン派研究の昨今」《解説》　単著　平成 6年　『英語青年』140, 131頁（研究社出版）
11.‘Wordsworth, Romanticism, and Canon: An Interview with Dr. Jonathan Wordsworth’《インタヴュー記事》　共著　平成7年　『英語青年』（140），pp.610-16（研究社）
12.「Canonの拡散」《解説》　単著　平成7年　『英語青年』140, 633頁（研究社出版）
13.「特集 ジョン・キーツ：　私の視点、世界の視点――historicizeの仕方あれこれ」　単著　平成7年　『英語青年』141, 506-07頁（研究社出版）
14.「バイロン著、東中稜代訳『チャイルド・ハロルドの巡礼』（修学社、1994）」《書評》　単著　平成 8年　『イギリス・ロマン派研究』（19-20），154-58頁（イギリス・ロマン派学会）
15.「英詩のアイデンティティ」《口頭発表報告》　単著　平成9年　国際コミュニケーション英語研究所_Irice Plaza_（7），34-40頁（国際コミュニケーション英語研究所）
16.‘Meditations on Byronic Ruins’　単著　平成11年　東京大学大学院総合文化研究科『超域文化科学紀要』（4），pp.59-80（東京大学大学院総合文化研究科）
17.「Percy Bysshe Shelley, “Ozymandias”――文法構造の断片化、そして《時》の勝利へ」　単著　平成14年　『英語青年』148（20-21），20-21頁（研究社）
18.「‘Egotistical Vocative’――あるいは、呼び出されたロマン主義的理想の自画像」　単著　平成18年　日本英文学会編『第78回大会Proceedings』131-33頁（日本英文学会編）
19.「海老澤豊著『田園の詩神――十八世紀英国の農耕詩を読む』（国文社、2005）」《書

評》　単著　平成18年　『英語青年』(152), 380-81頁 (研究社)

20.「代名詞の妙――三人称から二人称へ」《口頭発表報告》　単著　平成19年　日本バイロン協会編『会報』(11), pp.5-9 (日本バイロン協会編)

21.「Lord Byron, [The Dying Gladiator] from *Childe Harold's Pilgrimage*, IV――廃墟のなかの廃残の身」　単著　平成20年3月　『英語青年』153, 738-39頁 (研究社)

22.'Byron's Dying Gladiator in Context'(招待有・査読付)　単著　平成21年1月　*The Wordsworth Circle* 40 (1), pp.44-51

23.'Byron's Dying Gladiator: Its Source and Tradition'　単著　平成21年3月　『明星国際コミュニケーション研究』(1), pp.17-36

24.「アポロ像に恋して狂死したフランス乙女の系譜――廃墟と化した廃墟趣味 (バイロンの場合)」　単著　平成22年3月　『人文研紀要』(67), 253-81頁 (中央大学人文科学研究所編)

25.「二つの《瀕死の剣闘士》をめぐって――バイロンとラウシャム庭園における心の拡大と縮小」(査読付)　単著　平成24年 3月　『イギリス・ロマン派研究』36, 49-53頁 (イギリス・ロマン派学会)

26.「英詩註解――William Sothebyの剣闘士」(査読付)　単著　平成25年3月　明星大学教育学部編『明星大学研究紀要・教育学部』(3) (明星大学教育学部)

27.'P. B. Shelley, *terza rima*, and Italy: Con-fusion of Voices, Persons, and Poetic Forms'(招待有・査読付)　単著　平成26年　*POETICA* 82, pp.72-93 (Yushodo)

28.「英詩註解――George CROLYの『頻死のゲルマン人』*Paris in 1815*, Second Part (1821, 1830) より」(査読付)　単著　平成26年3月　『明星大学研究紀要・教育学部』(4), 53-72頁 (明星大学教育学部編)

29.「Tennyson, Pierpont, Longfellowの詩における統語的に反響する鈴の音――付、ShelleyとGrayの類例」(査読付)　単著　平成28年3月　明星大学大学院教育学研究科年報 (1), 27-35頁 (明星大学大学院教育学研究科)

30."SOTHEBY's Coliseum and the Menades: What Drunken Madness!?"(査読付)　単著　平成30年 3月　Research Bulletin of Meisei University / Education (8), pp. 19-36 (明星大学)

31.ジョン・クレア「夕べの鐘」の文法性 (査読付)　単著　平成30年6月　明星大学大学院教育学研究科年報 (3), 53-57頁 (明星大学)

32."Another Folio in Meisei Shakespeare Collection: A Descriptive Introduction to The Vase of Shakspeare with the Complete Transcript of the Larger Plaque"(査読付)　単著　令和 2年 3月　明星大学教育学部編『明星大学研究紀要―教育学部』(10), pp.1-19 (明星大学)

33.「齋藤勇の"magic casements"――後の齋藤英文学を胚胎する『英詩講義ノート(Keats篇)』」(査読付)　単著　令和2年3月　『明星――明星大学明星教育センター研究紀要』(10), 3-12頁 (明星大学)

＜その他＞

1.「キーツにおける社会性の芽生え」　昭和59年10月　イギリス・ロマン派学会第10

会大会（甲南女子大学）

2.「シェリーと都市」　平成3年10月イギリス・ロマン派学会第17会大会、シェリー生誕200年記念シンポージアム「シェリーにおける伝統と革新」（近畿大学）

3.「キーツの語り手」　平成4年5月　日本英文学会第64会大会シンポジウム第1部門「ロマン派における物語詩と語り手」（西南学院大学）

4.‘Shelley's Triumph and the Triumphal Tradition’ 平成4年8月　Wordsworth Summer Conference（Grasmere, UK）

5.「Shelley:‘To a Sky-Lark’――見えない鳥」　平成6年5月　第13回イギリス・ロマン派講座（青山学院大学）

6.「Shelley:‘Ozymandias’――廃墟・断片・ロマン派の美学」　平成7年5月　第14回イギリス・ロマン派講座（青山学院大学）

7.「英国ロマン派伝記資料集成［John Mullan, et al. eds., _Lives of the Great Romantics: Shelley, Byron, and Wordsworth by their Contemporaries_, 3 vols.（Pickering & Chatto, 1996）］」《書評》　単著　平成8年　『學鐙』（丸善）

8.「Shelley: Alastor――理想の探求」　平成8年5月　第15回イギリス・ロマン派講座（青山学院大学）

9.「英詩のアイデンティティ」　平成8年11月　国際コミュニケーション英語研究所、第60回月例報告会（国際コミュニケーション英語研究所（東京都千代田区神保町））

10.「私のシェリー研究ノートより――『生の凱旋』と「オジマンディアス」、付、ホラス・スミス作「オジマンディアス」」《解説》　単著　平成9年　文教大学越谷図書館 *Letters of the Shelley Collection*（文教大学越谷図書館）（11）

11.「*Childe Harold* の脱線の起源に関する審美学的考察」　平成9年10月　イギリス・ロマン派学会第23会大会（麗澤大学）

12.「Byron: *Childe Harold's Pilgrimage* ――脱線のおもしろさ」　平成10年5月　第17回イギリス・ロマン派講座（青山学院大学）

13.‘Byronic Ruins’ 平成10年8月　Wordsworth Summer Conference（Grasmere, UK）

14.‘Meditations on the Acropolis’ 平成11年9月　25th International Byron Conference（Messolonghi, Greece）

15.「地誌から叙情へ」　平成11年9月　イギリス・ロマン派学会第25会大会シンポージアム（早稲田大学）

16.「Byron: *Childe Harold's Pilgrimage* ――バイロンの描くナポレオン」　平成12年5月　第19回イギリス・ロマン派講座（青山学院大学）

17.「「教訓」について」《解説》　単著　平成13年　『ふぉーちゅん』（12）

18.「英詩の音と意味と文法構造」　平成13年5月　第20回イギリス・ロマン派講座（青山学院大学）

19.「John Dyer, *Ruins of Rome* を読む」　平成13年7月　イギリス・ロマン派学会第69回四季談話会（大妻女子大学）

20.「コロセウムのさまざま」　平成13年7月　日本バイロン協会談話会（滋賀医科大学）

21.「イギリス自然神学詩について」　単著　平成14年10月　『學鐙』（丸善）99（10）

22.「Keats: *The Eve of St. Agnes* ――中世ロマンスの世界」　平成15年5月　第22回イ

ギリス・ロマン派講座（早稲田大学）

23.「John Dyer: ‘Grongar Hill’, ‘The Country Walk’ ――いわゆる「地誌詩」の訓言と叙情」　平成16年5月　第23回イギリス・ロマン派講座（早稲田大学）

24. 第23回イギリス・ロマン派講座（学会創立20周年記念）「John Dyer: ‘Grongar Hill’, ‘The Country Walk’ ――いわゆる「地誌詩」の訓言と叙情」　単著　平成16年5月　第23回イギリス・ロマン派講座（学会創立20周年記念）（早稲田大学）

25.「Shelley Symposium 2005: *The Triumph of Life*」　平成17年12月　日本シェリー研究センター第14回大会、司会＆レスポンス（東京大学）

26.「‘Egotistical Vocative’ ――あるいは、呼び出されたロマン主義的理想の自画像」、「詩人の詩人論」　平成18年5月　日本英文学会第77回大会シンポジアム（中京大学）

27. ‘Mis-correspondence of Pronouns in Byron’　平成18年6月　32nd International Byron Conference（Sorbonne, Paris, France）

28. 大石和欣編 *Introduction to English Romanticism*.　共著　平成19年　（http://www.campus.u-air.jp/ ～ gaikokugo/romanticism/index.html）（放送大学）

29.「代名詞の妙――パリ学会報告」　平成19年6月　日本バイロン協会談話会（大分、由布院）

30.「Dunをめぐる廃墟詩」　平成19年11月　日本スコットランド協会、第30回「スコットランドを語る」（東京、南青山）

31. ‘Byron’s Dying Gladiator: Its Source and Tradition’　平成20年8月　Wordsworth Summer Conference（Grasmere, UK）

32.「『ハロルド』におけるアポロの伝統」　平成21年6月　日本バイロン協会談話会（愛知工業大学）

33.「廃墟と化した廃墟趣味――バイロンにおけるピクチャレスク」　平成21年12月　日本シェリー研究センター（東京大学）

34.「バイロンとその時代――英国のハロルド、アルプスのマンフレッド、そして欧州のバイロン」　単著　平成22年5月　『月刊　都響』（東京都交響楽団）（267）

35.「CHINNERY, “The Statue of the Dying Gladiator” ――剣闘士詩の系譜（Byronから Wordsworthまで）」　平成22年6月　第29回イギリス・ロマン派講座（東京、早稲田大学）

36.「『パノラマ』はエディンバラで生まれた」　単著　平成22年6月　『スコットランド便り』（日本スコットランド協会編）（66）

37.「横溢する叙情性――Wordsworthと Byronの場合」　単著　平成23年5月　日本英文学会第83回大会シンポジアム「詩のことばと散文のことば――韻文の存在理由を探る」発題・司会（北九州市立大学）

38.「二つの《瀕死の剣闘士》をめぐって――バイロンとラウシャム庭園における心の拡大と縮小」　単著　平成23年10月　イギリス・ロマン派学会第37会全国大会シンポージアム「庭園史のなかのロマン派詩人たち」（山梨大学）

39.「Peter Otto, *Multiplying Worlds: Romanticism, Modernity, and the Emergence of Virtual Reality*（Oxford, 2011）」《書評》　（査読付）　単著　平成24年3月　『イギリス・ロマン派研究』36

40. やさしい英詩入門　単著　平成24年6月　第31回イギリス・ロマン派講座（早稲田大学）
41. Sothebyの剣闘士　単著　平成24年9月　第155回関西コールリッジ研究会（同志社大学k）
42. William Sotheby: From Italy（“The Coliseum” Passage）　剣闘士、そして未来の廃墟　単著　平成25年6月　第32回イギリス・ロマン派講座（早稲田大学）
43. P. B. Shelley, terza rima, and Italy　単著　平成26年5月　Romantic Connections（University of Tokyo）
44. CROLY: , From Paris in 1815（1821, 1830）　ゲルマン民族の英雄ヘルマン［アルミニウス］の死　単著　平成26年6月　第33回イギリス・ロマン派講座（早稲田大学）
45.「英詩を文法的に読む愉しみ」　単著　平成29年5月　日本英文学会第89回全国大会（静岡大学）
46. “Sotheby’s Coliseum and the Menades: What Drunken Madness!?”　単著　平成29年8月　2017 Wordsworth Summer Conference（Ambleside, Cumbria, UK）
47. Reader, looke / Not on his Picture, but his Booke.: DMU Workshop on Meisei Copies of the Shakespeare First Folio（和訳：シェイクスピア、ファースト・フォリオの学術的価値を求めて――ドゥ・モンフォート大学ワークショップの記録）　共著　平成30年3月　（Meisei University）
48. 齋藤勇の“magic casements”――後の齋藤英文学を胚胎する「英詩講義ノート（Keats篇）」　単著　令和元年6月　第17回大会シンポジウム「紹介から研究へ――若き齋藤勇の英詩講義ノート（新発見！）を読む」（東京、東洋大学）
49. “Croly’s Dying Warrior: The Roman Gladiator That Crossed the Boundary and Turned into Hermann/Arminius”　単著　令和元年9月　Transgressive Romanticism: Transgressing Boundaries, Limits, Taboos（Vechta, Germany）
50. “The Vase of Shakspeare at a Fuller Glance”（和訳：「The Vase of Shakspeareの見どころ」）　単著　令和2年3月　https://youtu.be/e0ppsXtOZc0（明星大学）
51.「The Vase of Shakspeare早わかり」　単著　令和2年3月　https://youtu.be/NGKGZc3pCIiU
52. Shakespeare in Silver（和訳：「純銀製のシェイクスピア劇」）　単著　令和2年7月　https://kenkyu.hino.meisei-u.ac.jp/vase-sh/（明星大学）
53. “Reader, looke / Not on his Picture, but his Booke.: DMU Workshop on Meisei Copies of the Shakespeare First Folio: Cumulative Edition 2020 and After”　単著　令和3年8月　（Meisei University）
54.「英詩を味わうのに必要な読解力を高めるには」　単著　令和4年5月　日本英文学会第94回全国大会シンポジウム「英語読解力再考：『英語が読める』とはどういうことか？（オンライン開催）

笠原順路先生のご定年に寄せて

髙　橋　和　子

2023年3月に本学をご退職される笠原順路先生に、心より御礼申し上げます。誠に僭越ながら、先生のご経歴・ご業績について、紹介させていただきます。

先生は、東京教育大学文学部文学科英語学英文学専攻を1975年に卒業後、数年間、都立高校、筑波大学附属学校で教鞭を執られました。その後、東京大学大学院人文科学研究科修士・博士課程でイギリス文学を研究、同博士課程を中退後、東京農工大学講師・助教授、東京大学助教授を経て、1999年より明星大学人文学部英語英文学科教授、改組により国際コミュニケーション学科を経て、2010年より教育学部（通学課程及び通信課程）で教鞭を執られました。その間、大学院人文学研究科英米文学専攻主任、国際コミュニケーション学科主任、大学院教育学研究科長を歴任されました。

専門は、イギリス文学、特に18-19世紀の詩を精読し、註釈を付すことに専心されました。中でも、文学研究が文化研究の一部を成すとされる昨今の学問的風潮のなかで、一次テキストの精読を実践、その大切さをご自身の研究を通してご教示くださいました。この分野の主なご業績には、「Percy Bysshe Shelley, 'Ozymandias'――文法構造の断片化、そして《時》の勝利へ」『英語青年』第148巻 (2002)、『地誌から叙情へ――イギリス・ロマン主義の源流をたどる』（編著、明星大学出版部、2004）、「Lord Byron, [The Dying Gladiator] from *Childe Harold's Pilgrimage*, IV――廃墟のなかの廃残の身」『英語青年』第153巻 (2008)、『対訳 バイロン詩集』（編訳、岩波文庫、2009）などが含まれます。特に『対訳 バイロン詩集』は笠原先生の全業績中の白眉と言えます。

一方、先生は作品の味読・精読のために必要とされる場合は、躊躇なく文化研究的手法も取り入れてこられました。この分野の主なご業績として、高松雄一編『想像力の変容――イギリス文学の諸相』（研究社出版、1991）所収の「シェリー・凱旋門・そして「生」――『生の凱旋』研究の序にかえて」、"Byron's Dying Gladiator in Context", *The Wordsworth Circle*, Vol. 40, No. 1 (2009) などが挙げられます。この場合にも論文題名に示されている通り、あくまでも作品への「序」、または作品の置かれた背景（context）として研究するという姿勢を堅持してこられました。この方針はゼミの指導でも貫かれ、これまでの笠原先生ゼミ生の卒業論文は、各自の好きな映画作品のテキストに註をつけるという基本方針に沿ったものが中心でした。

先生のこれまでの所属学会・主な役職に目を向けますと、日本シェリー研究センター会長 (2007-11)、イギリス・ロマン派学会会長 (2012-16)・同編集委員長 (2006-12; 2016-18)、日本バイロン協会理事 (2001-22) など、要職を歴任されています。先生の学会活動

は国内に留まらず、英国湖水地方Grasmereで毎年夏に開催されるWordsworth Summer ConferenceのConvener を務められ（2000–05）、日本人参加者の慫慂に尽力した経歴もお持ちです。

最近は、唯一明星大学に所蔵されている貴重収蔵品の紹介・研究、さらに教育への活用を精力的に行ってこられました。資料図書館4階の齋藤勇（たけし）文庫（昭和の日本英文学会を代表する第一人者の蔵書）から同先生が約100年前に東京帝国大学などで行った英詩講義ノートを発見し、学外の研究者と共同研究を行い、その成果を『明星大学明星教育センター研究紀要』第10号（2020）に一括投稿し、掲載されたことは記憶に新しい点です。また、資料図書館蔵で、シェイクスピアの登場人物をかたどった純銀製の装飾置物The Vase of Shakspeare（sic.）を“Another Folio in Meisei Shakespeare Collection: A Descriptive Introduction to The Vase of Shakspeare with the Complete Transcript of the Larger Plaque”『明星大学研究紀要―教育学部』第10号（2020）で紹介され、さらにウェブサイト（https://kenkyu.hino.meisei-u.ac.jp/vase-sh/）を制作、このサイトを使って「教育学基礎演習2」の授業を展開、「本物に触れる教育」を実践されました。

明星大学最後のご業績として、これまで国際バイロン学会やWordsworth Summer Conferencesでのご発表（主にThe Statue of the Dying Gladiatorを主題にした詩行を精読したもの）を中心にまとめた英文のご著作*Variations on the Dying Gladiator and Other Essays on Byron*を出版される予定です。

先生のご経歴・ご業績を改めて振りかえりますと、圧倒される思いです。その一方で、先生は誰よりも自然を愛し、本学の自然あふれるキャンパスを散策されるお姿は、忘れることができません。末筆ではございますが、笠原順路先生の今後のご活躍、ご健勝を心よりお祈り申し上げて、御礼の言葉とさせていただきます。